

注意と視覚的意識

玉川大学脳科学研究所 小口峰樹

M. マッテンは、近年の認知科学や神経科学の知見に対する理論的反省を通じて、「自然化された概念主義」とでも呼べる立場を提唱している。彼によれば、初期視覚に備わる感覚的分類のメカニズムは、諸性質を意識経験の成立に先立ってコード化し、それらに関連する対象のもとへ統合することで、意識経験に命題的構造をもった概念的内容を与える。

しかし、このメカニズムは意識経験が成立する手前で働くのであり、また、閾下知覚や半側空間無視の事例は、感覚的分類の結果が何らかの無意識的な認知的処理に利用されうると示している。だとすれば、視覚刺激に対して概念的分類が行われることと、それが意識的な視覚経験の内容になることとのあいだには、なおいくばくかの距離が介在していることになる。では、この距離はどのようにして埋められるのだろうか。

ここで考察の糸口となるのは、分類結果を統合する基盤となるところの対象を与える「視覚的指標（Z. ピリシン）」のメカニズムが、ある種の「注意」のメカニズムであるという点である。J. J. プリンツは、近年、対象を意識することによって、その対象に注意を向けることが必要十分であるとする理論（AIR理論）を提唱している。本発表では、このAIR理論を批判的に検討することを通じて、上述の距離を見定めるという戦略をとる。

プリンツによれば、意識の媒体となるのは知覚処理システムのなかで中間レベルに位置する表象であり、注意はこの表象を作業記憶に対して利用可能にすることで、それを意識的なものにするという機能を有する。だが、不注意盲実験に対する解釈を通じて析出される「意識の周縁部」という論点は、AIR理論に反して、意識にとって注意が必要ではないことを示している。だとしても、プリンツによる注意の機能分析は有益であり、それは注意が概念的内容に対して知覚的判断へのアクセス可能性を保証するものであることを告げている。さらに、もし現象的意識に関する機能主義な見方が正しいとすれば、注意の働きは上述の距離を埋める役割を果たすと結論できる。